國學院大學学術情報リポジトリ

武田泰淳と翻訳：
武田泰淳訳謝冰心「私の見た蒋夫人」を中心に

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2023-02-05
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 郭, 偉, Guo, Wei
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000581

武田泰淳と翻訳

―武田泰淳訳謝冰心「私の見た蔣夫人」[1]を中心に―

郭　偉

武田泰淳（一九一二―一九七六）は中国文学研究から出発した小説家である。旧制浦和高等学校時代にすでに胡適や魯迅を読み始めたが、一九三一年、東京帝国大学支那哲学支那文学科に入学してから、中国文学研究者となるべく、中国文学、とりわけ同時代の中国文学を広く渉猟し、数多くの批評、紹介、翻訳の文章を残した。その仕事は今日でもなお日本の中国文学研究者に注目されているのであって、改めて武田泰淳が日本の中国現代文学研究領域での開拓者の一人であることを再認識させる[2]。

本論で取り上げる武田泰淳訳謝冰心（冰心とも表記）「私の見た蔣夫人」は二〇〇〇年代に入ってから盛んになった、戦後日本滞在時期の謝冰心研究にとって重要な逸文であり、国内外の謝冰心研究者から大いに関心を集めた[3]。一方、その文章が武田泰淳年譜に記載されず、関連資料もまた少なかったため、二〇〇五年、武田泰淳と翻訳に関する初歩的研究を行った拙論の中で、翻訳作品リストに入れ、その存在を示しただけだった[4]。その後、私が入手した武田泰淳関連の新資料（後述）の中に謝冰心に言及した文章もあったが、さらに、その後の謝冰心研究から、武田泰淳による戦後初期の数編の逸文（後述）の発見にも到った。それらは、謝冰心に関する文書やその他中国作

家作品の翻訳を含む資料群だが、いずれも武田泰淳全集未収録であり、泰淳年譜にも記載がない。管見のかぎり武田泰淳研究ではそれらについての言及は皆無である。本論は新たに発掘された資料の整理と読解を通して、武田泰淳訳謝冰心「私の見た蔣夫人」をめぐる文脈を明らかにし、武田泰淳の謝冰心観について検討する。同時に、武田泰淳と翻訳というテーマに関する筆者のこれまでの研究を補足したい。

一　武田泰淳の逸文「少年の一瞥　五・四文学について」（上）（下）

「少年の一瞥　五・四文学について」は「（上）」と「（下）」の二つの部分からなる。それぞれ東京で発行された日本語新聞『中華日報』一九四七年五月八日と九日紙上の二ページ目にある「文化欄」に掲載された。「（上）」の部分は当該新聞文化欄の「五・四記念特輯（三）」の一番目の文章であり、「（下）」の文末には「筆者は中国文学同人」という注記がある。両者ともに「武田泰淳」の署名があり、またそれぞれの文章の前に鉄耕による木版画「期待」・「友人の家」が配され、非常に目立つ。版画の下に画家の名前のほかにそれぞれ「内山氏所蔵（目下中国研究所にて展覧中）」と「中国初期木刻（内山氏）」などの文字が記されている。鉄耕とはすなわち木刻版画家の陳鉄耕（一九〇八―一九六九年）である。内山は内山完造（一八八五―一九五九年）か、その弟の内山嘉吉（一九〇〇―一九八四年）であろう。鉄耕は一九三一年、上海にて中国左翼美術家連盟に加入し、同年、魯迅が主催し、内山嘉吉が講師を担当する木刻講習班に参加した版画家である。さらに「（上）」が掲載された頁の中央部分に「新しい中日の楔に　上海残留日本人の心意気」という題の記事があり、それは上海ＸＯＲＡ放送局より日本向けに放送された、上海日僑互助会理事長による講演の記録である。「左翼的」また「上海」の色合いが濃厚に滲み出ている紙面構成だが、それは、武田泰淳がかつて三十年代初期に左翼運動に参加したこと、また、当該文章発表の一年前に上海から帰国したこと、並びにそれらの経歴に伴う人間関係を思い起こさせるものである。

「少年の一瞥　五・四文学について」はその題の通り、武田泰淳は五・四文学を少年少女の文学に喩えているものである。書き出しは次のように書かれている。

「五・四頃の文学作品には、どれも少年少女が思いつめたような、美しい緊張が感ぜられる。澄んだ眼が未知なるもの

への不安のために見張られ、汚れない指先は希望に向つておず〳〵とさしのべられ、若々しい唇が気一本に結ばれ、興奮にふるえている。そのような純粋にして素撲な表情があつた。そして計算のゆきとどかない、あてどもない創作行為があつた。」

続いて、武田泰淳は茅盾らの文学研究会を例として挙げ、茅盾の自ら称している「きわめて散漫なる文学集団」の、発起人たちの状況を「文藝に対する意見も一致せず、一致させようともしなかった。ただそこには期せずして、遊戯的な、ひまつぶし的な文学観に対する厭悪があつた。それは趣味や性格を異にする少年少女が、好悪の念の明確さに於いて一致するのに似ていた」と指摘した。そして、五・四時期の冰心、郭沫若と郁達夫らの創造社ないし魯迅の創作活動に対する理解を述べた上で、五・四文学についても「五・四は混沌であつた混沌に恵まれていた。驚異がみち〳〵ていた。暗示がつづき、発見が絶えなかつた」と評価している。最後に、「文学にとつて五・四の反封建とは何であるのか」という問いに答える形で次のように全文を結んでいる。

「文学が文学で有りつづけるために、一人々々の作家が自分の眼で看、自分の筆で試みたことである。他人の言葉で、自分の暮らしを立てぬことである。冰心には冰心の感動があり、沫若には沫若の詩情があり、魯迅に魯迅の暗黒があつた。それらすべてをはぐくみながら、少年の一瞥にも似た鋭い記録や浴すべき湯水もなき嬰児の冒険を、後の世の作家の感情にきざみ込み、溶け入らせ得た時代を想起し、作家が作家たる自覚をよみがえらせること、それこそ五・四を文学的に紀念することではないか。五・四の作品を大ざつぱにまとめあげ、非文学的レッテを張り、創作の喜びも疲れも知らず、五・四は反封建、五・卅は反帝反資本と、毎年とりかえすそのきまり文句の許すべからざる封建性を、中国文学評論の世界から消滅させること。これこそ五・四的、少年的な紀念方法ではなかろうか。」

謝冰心については、武田泰淳は「冰心の『あわれこの身の朽ちはつる』を読むと、五・四学生運動の幼さ弱さがわかるが、同時にそれにふれた作家の幼さ弱さ、ひいては純粋さと素撲がしみ〳〵と感ぜられる」と述べている。「あわれこの身の朽ちはつる」と感傷的になっているのは主人公の二人の少年が、親

に阻止され、学生運動に参加できないためである。それについて武田泰淳は「私たちはその子供らしさ、たわいなさを笑うことはできない。この二人の小さな悲しみはあくまで真実であり、ささやかながら人生に対する出発である。そしてこのような単純な光景に感動することが、冰心を作家たらしめたのであつた」と指摘する。

ここで注目したいのは、「少年の一瞥　五・四文学について（上）」のすぐ後に、「五・四と冰心女史」と題する無署名の文章が配されていることである。「五・四記念特輯（三）」の枠内の二番目の文章に当たるそれには、ソファに腰かけている謝冰心の全身を写した写真とともに、謝冰心の自筆らしき色紙の写真が付されている。色紙には謝冰心署名入りの、「五・四」と題する「仿俳句十七音体」短詩が書かれている。「像一声春雷——震起　満天歌吹　満地青翠　五四」（「春雷のように　鳴り出し　空いっぱいの歌声　大地あまねく青翠　五四」——郭偉試訳）。文章はそれほど長くない。『新青年』、文学研究会と『小説月報』に簡単に触れた上で、当時、人生派と言われた作家に伍して、新文学運動以来最初の閨秀作家の誉をかち得た人こそ謝冰心だとし、五・四の当時、女史は協和女大にいたが、燕京大学に転じ、時代思潮と文学への情熱が「二つの家庭」という作品になって、文学研究会の機関誌の一つである『晨報副刊』に発表されたこと、一九二三年に卒業すると浪漫作家の落花生（許地山、郭偉注）と同時期に米国に留学したこと、のちに社会学、人類学者呉文藻博士（一九〇一—一九八五年）と結婚したこと、女史の作品が中国の新青年男女の心に影響を与えていること、などを紹介している。結末では「昨秋、夫君の東京赴任とともに来朝して、目下、麻布の中華民国代表団の官舎——白壁の塀の瀟洒な日本家屋に十歳になる令嬢宗黎さんと初めての東京の生活を味わっている女史は美しい北京のことばで、若き日の五・四の想出をぽつり〳〵語る——円熟した中国の教養をしみじみ感ずる。この詩は特に本紙特輯に寄せられたものである。」と締めくくっている。

ところで、無署名の「五・四と冰心女史」は武田泰淳による文章とは断定できない。[5] なぜなら、武田泰淳が『中華日報』を「本紙」と称する可能性は低いからである。可能性という点から言えば、「五・四記念特輯（三）」において、武田泰淳の文章と謝冰心の写真および色紙の写真が付された無署名記事を並べる紙面構成は、編集者の意図によるものであろうと推測される。武田泰淳「少年の一瞥　五・四文学について（上）」と無署名記事「五・四と冰心女史」とがそれぞれを互いに補足する効果が

結果的に見られるのである。読者は翌日の同紙に掲載された「少年の一瞥　五・四文学について（下）」を読んで初めていわゆる「少年の一瞥」とは佐藤春夫が「月光と少年」のイメージを用いて魯迅の短編小説について語ったことから得た着想だとわかる。「上」部分を読んだだけでは読者はある種の先入観を持つ可能性が大いにある。つまり武田泰淳のいう「少年の一瞥」から謝冰心を連想し、さらに謝冰心の角度から五・四文学を想像する。武田泰淳は書き出しで五・四文学を少年少女の文学に喩えるのにあたって、「純粋」「素撲」といった言葉を用いたが、少年を主人公とする謝冰心の作品を紹介する際もまた再び同じ言葉を用いた。それにより読者は「五・四と冰心女史」で、謝冰心も当時女学生であったと知った時、おのずから武田泰淳が描いた五・四的少年少女の表情を脳裏に思い浮かべるであろう。「……澄んだ眼が未知なるものへの不安のために見張られ、……」と。

『中華日報』の紙面構成を分析することは、もとより本稿の主な目的ではないが、これまですでに同紙に複数の文章を発表した武田泰淳は編集者の意図を理解し、またある程度それに協力していることはありうる。五・四文学の持つ反封建の意味に関する武田泰淳の解釈はまた氏の謝冰心理解とも深く結びついているのである。「文学が文学で有りつづけるために、一人々々の作家が自分の眼で看（ママ）、自分の筆で試みたことである。他人の言葉で、自分の暮らしを立てぬことである」と。武田泰淳訳謝冰心「私の見た蔣夫人」が一ヵ月前に発表されたばかりであることを念頭におくと、上記の言葉は、謝冰心による当該文章の翻訳者である武田泰淳の評価だとも言えよう。あるいは、武田泰淳が「私の見た蔣夫人」を翻訳することを通して五・四時期の謝冰心作品への理解を深めたとも考えられる。

二　武田泰淳の逸文「中国文学と世界」における謝冰心とその他について

武田泰淳「中国文学と世界」は一九四六年三月一日、上海で創刊された日本語雑誌『新生』の創刊号に掲載されている。『新生』の発掘者である秦剛氏によると、『新生』は中国国民党中央宣伝部対日文化委員会上海分会により、上海の日僑及び武装解除された元日本軍人を対象として発行された雑誌である。一九四六年六月十五日の休刊まで合計六期刊行された。堀田善衛が当該雑誌の編集に関わっているが、堀田が戦後の上海で国民党に徴用された時期の重要な仕事の一つでもある。[6]

『新生』創刊号執筆者紹介の中では、武田泰淳の肩書は「中国文学研究家」とされている。「中国文学と世界」では、確かに「中国文学研究家」武田泰淳の同時代中国文学に関する博覧強記ぶりが遺憾なく発揮されている。林語堂の『北京好日』（原題『京華煙雲』）、『啼笑皆非』、『戈を枕にして旦を待つ』（原題『枕戈待旦』）から、胡適、謝冰心へ、また田漢、郭沫若、郁達夫と周作人ら代表的な留日経験のある作家から巴金や茅盾まで、現代中国作家と世界の関係について分析と論評を行っている。以下は謝冰心に言及した部分である。

「世界的混沌の中を異国に旅し、異族に接する人々は、自分の眼力の及ぶかぎり、おのづから天涯の路を望み盡す文学的境界に入るのである。胡適はその務を「藏暉室劄記」に於いてはたし、冰心は「小さき者への手紙」に於いて之をはたした。かつて新進学徒胡適の青春は、それがためにこのアメリカ留学中の劄記に凝結したのである（。）また女作家冰心の作家的天分は、この海を越えたアメリカからの子供達への通信の裡にはぐくまれてゐたのである。中国文学の世界性は中華民国文学の発生と共にすでに発展しつつあつた（。）ひとり林博士のみならず、中国作家は独り高楼にのぼつて、西の方、あるひは東の方、精神の天涯を望みつくさんと様々な努力をした。此処に中国文学と世界の一つの問題があるのである（。）（田漢、郭沫若、郁達夫等創造社の人々、周樹人兄弟のごとき日本留学生出身の作家の運命も、この問題と結びつけて考へる時、はじめて新鮮さを持つと思はれる。）[7]」

『藏暉室劄記』とは、胡適のアメリカ留学時の日記である。武田泰淳はかつてこの日記から得た材料を元に、胡適を主人公にした短編小説「E女士の柳」を創作し、中国文学研究会の同人雑誌『中国文学』（第六十八号、一九四一年一月）に発表した。「E女士」とは、胡適日記中に登場する「韋蓮司」ことE・クリフォード・ウィリアムズである。彼女は、胡適のアメリカ留学中に出会い、恋愛関係にあったが、結婚はせず、以後長きにわたり彼と親交を結んだアメリカ人女性である。この小説の中で、「E女士」はニューヨーク・ダダイズムの画家として登場し、東洋芸術に心酔し、当時の西洋社会に多くの不満を抱いていた。対して、「胡適」という名のアメリカ留学中の中国人学生は、祖国の近代化のために勉学に勤しみ、また西洋文明に傾倒していたため、「E女士」の「狂狷」が理解できない。東洋と西洋それぞれの文明に対する互いの認識において、二人は鮮明な対

照をなしている。このような対照的な人物像には、東西の近代に対する武田泰淳の思考が反映されている。それは、文学者の異文化体験と中国文学の近代化の関係を見つめた「中国文学と世界」と一脈通ずるものである。また、謝冰心を胡適と並べて論評することは、謝冰心に対しても胡適と同等の文学的好奇心を抱いていることを示している。

「中国文学と世界」の最後には「私は日僑の腕章をつけてひとり街を歩く時、外套をかぶつて畳の上に横たはる折、以上の諸作家が思ひ〳〵の動力を駆使して、中国文学の世界性のために奮闘する水滸伝的宇宙を胸に描いて、いささか心楽しくなることもある。そしてやはり文学はいいな、読めばわかるから、と私は私なりに中国現代文藝楼を想像して満足する」[8]と書かれている。謝冰心も明らかに武田泰淳を「心楽しく」させている作家の一人であり、その自分なりの「中国現代文藝楼」を構成する一部分である。だからこそ、謝冰心「私の見た蔣夫人」の翻訳は、単なる蔣夫人への興味からではないと言えるのではないだろうか。

一方、『新生』に掲載された「中国文学と世界」は、武田泰淳が謝冰心「私の見た蔣夫人」を翻訳、ないし『中華日報』に文章を掲載する契機になった人脈を探る手掛かりも提供している。『新生』の発行主体は中国国民党中央宣伝部対日文化委員会上海分会であるが、武田泰淳と当該組織との関連は『改造日報』でも見られる。『改造日報』は日本敗戦後の上海で帰国待機中の日本人居留民向けに発行された新聞である。一九四五年十二月三十日の紙面に対日文化委員会主催の文藝懇談会に関する報道があり、出席者の中に武田泰淳の名前が見られる。なお、当該報道によると、その時の文藝懇談会では中国の現状を日本に紹介するため、日本語に訳すべき中国の文芸作品の選定方針その他について協議・懇談したとのことである。[9]島田大輔の調査によると、『中華日報』は、戦後のアメリカ占領期の東京で発行された唯一の華僑新聞である。それは一九四六年、台湾出身の華僑・羅錦卿によって創刊され、中国駐日代表団と密接な関係があり、主に代表団の中でも文化教育を担当する第四組の指導下にあった。[10]創刊理念は中国の実情を正確に報道・紹介し、中国人の論文を訳載することで日本人の中国認識を深化させ、日中文化人の共鳴提携を実現することである。『中華日報』は読者を華僑に限定せず、新聞を通じて日中の相互理解と文化交流を目指していた。それは武田泰淳が上海で出席した、対日文化委員会主催の文芸懇談会の議題と軌を一にしているのが明らかである。当然ながら中国駐日代表団は中国国民党中央宣伝部

対日文化委員会の方針に沿って対日文化工作を展開していたのである。[11]

武田泰淳は「中国文学と世界」において中国文学研究者としての実力を見せ、また作家謝冰心への関心を示していた。謝冰心「私の見た蔣夫人」の翻訳と『中華日報』への寄稿といずれが先であるか、現段階では判断できない。[12]ただ、武田泰淳訳謝冰心「私の見た蔣夫人」の注釈、および『中華日報』に掲載された「五・四と冰心女史」で紹介されているように、一九四六年秋、謝冰心は当時の国民党政府の駐日代表団のメンバーである呉文藻の夫人として訪日しているのである。武田泰淳が謝冰心「私の見た蔣夫人」を翻訳し発表した後、駐日代表団の指導下にある『中華日報』から原稿を依頼されるのも自然な成り行きであろう。

三　武田泰淳訳「私の見た蔣夫人」と武田泰淳「宋慶齢と宋美齢」

「私の見た蔣夫人」の書き出しは次のように書かれている。「主婦之友社から、蔣介石夫人についてとのご依頼です。蔣夫人とはそれほど親しいとはいへない私ですが、彼女を日本の女性に紹介するのはうれしいことです。彼女こそ中国の真に偉大な主婦の一人なのですから」。結末は以下のとおりである。「私が東京にまゐります前、夫人の日本の友人に手渡すやう書物を数冊託されてきました。そのときのお話では、夫人は中日国交親善の前途に非常な関心を示してゐられました。私は私たち一同が夫人の期待にそむきませんやう希望してをります。」その内容は三つの部分に分けられる。まずは謝冰心が一九二四年アメリカのウェルズレー女子大学に在学中、アメリカの教師たちから同校を一九一七年に卒業した中国人留学生、宋美齢嬢について誇らしげに語り聞かされ、帰国後もしばしば新聞や雑誌で宋美齢の写真、談話を目にするが、直接面会したことがないことなどについて書かれた導入部分である。次は、重慶で蔣夫人と面会した時のことについてであるが、当該文章の紙幅の大半を占めている。謝冰心は日中戦争の勃発で北平（当時の北京）から雲南の昆明に移住したが、一九四〇年の秋、蔣夫人の誘いを受け当時の首都・重慶に飛び、三回に渡って蔣夫人の住む官邸に赴き、蔣夫人の指導する新生活運動婦女指導委員会の仕事について話し合う会合などに参加した。そして蔣夫人の誘いと説得に応じて一家をあげて昆明から重慶に引っ越し、夫婦ともに当時の国民党政府関連の仕事に参与するようになった。[13]最後は蔣

夫人についての簡単な紹介である。一九二七年、蔣介石が二人の結婚に際し新聞紙上に発表した感想や日中戦争時の中国軍とともに行動する夫妻の生活についての蔣夫人によるエッセイなどが引用された。全体的な内容は、主に蔣介石夫人としての家庭生活についての紹介である。

謝冰心は主婦之友社から蔣介石夫人を紹介する原稿を依頼され、題を「私の見た蔣夫人」にしたのであるが、それはまた武田泰淳が捉えた五・四文学の特徴、すなわち「作家が自分の眼で看（ママ）、自分の筆で試みたことである。他人の言葉で、自分の暮らしを立てぬことである」と合致する書き方である。「私の見た蔣夫人」の主要部分は、重慶での三回の面会時に「見た」蔣夫人のことである。武田泰淳の訳を借りると次のようである。「鋭く賢い、すらりとした身体に精気があふれ、殊に清く澄んだ眼が素晴らしい」、「英語の方が楽に巧みにお話になれるやう」であり、また、「夫人の態度にはとりつくろつたところが全くなく、いかにも自然で、おだやかで、情のあつい主婦であるとしみじみ感じさせられました」という「蔣夫人」像である。

さて、武田泰淳「宋慶齢と宋美齢」は一九五四年十二月号の『婦人公論』に掲載されている。宋家の姉妹二人の結婚と政治的立場の相違によるその後の異なる歩みを紹介することによって、孫文時代から蔣介石の遷台時期までの中国国民党の歴史を映し出している。[14] 日中戦争時の蔣夫妻については次のように述べている。「国家を守ろうとする宋美齢の決意は、ホンモノだったに違いない。敵を打ち破りたいという彼女の夫の願いも、ウソではなかったはずだ。だが、悲しいことに、彼女たち夫妻の脚は官僚資本と軍事独裁の地盤の上に立っていた。しかもその地盤は、四億の農民の血と涙で塗られ固められたものであった。戦争の苦しみを正直にまともにこうむっている農民たちの心は、次第にはっきりと二人からはなれはじめた。」そして、結語は「妹は台湾に逃げのび、姉は新政府の柱石となった」である。

武田泰淳「宋慶齢と宋美齢」と武田泰淳訳「私の見た蔣夫人」との間には七年間の時間的隔たりがある。その間に中国、日本ないし東アジア、全世界に大きな転換があり、武田泰淳自身も、上海から帰国した中国文学研究者・中国文学研究会会員から北海道大学助教授、さらに小説家へと転身し、日本戦後文学の旗手の一人となった。「宋慶齢と宋美齢」では武田泰淳はより広い視野に立脚し、宋慶齢との対比によって謝冰心の文中の宋美齢像を相対化したのである。だが、興味深いことに、武田泰淳は当該文章において蔣夫人に関して、アメリカの女流作家コー

ネリヤ・スペンサーの『中国の三姉妹』やルーズベルトの息子小ルーズベルトによる回想記だけを援用し、自分の翻訳した謝冰心の文については全く触れなかった。その後、武田泰淳には謝冰心と何回も直接な交流があった。例えば、一九六二年、カイロにて開催されたアジア・アフリカ会議、一九七四年東京で行われた日中作家の交流活動など、二人とも出席している。[15]にもかかわらず、武田泰淳は謝冰心「私の見た蔣夫人」について言及していない。なぜだろうか。その答えのヒントを武田泰淳晩年の作品「月明、笛と風がきこえる」（『文芸展望』第九号、一九七五年四月）に求めることができると考える。

「謝冰瑩と謝冰心は一字ちがいで、間違えられやすい。謝冰心は、日本では有名な女流作家で、今は北京の作家協会に属し、文化大革命で幹部学校に入りなどして、運命を気づかわれたが、去年、代表団の一員として来日して面接したから、健在なことは、まちがいない。ニクソン訪中後は、アメリカ寄りとうたがわれていた彼女は、かえって活躍の場がふえたことであろう。謝冰瑩の方は、今は台湾にいて、息子さんがアメリカに留学し、彼女もアメリカへ行き、日本にも立ち寄ったが、私はあっていない。」

ここの「運命を気づかわれた」という言葉は注目に値する。謝冰心は一九五一年中華人民共和国となった中国大陸に帰国し、謝冰瑩や蔣夫人と相反する方向を選択した。日本では、一九五四年になって、ようやく、北京を訪れた影山巍、倉石武四郎等による謝冰心へのインタビューで、謝冰心の近況が伝えられたのである。[16]同じく一九五四年に武田泰淳は「宋慶齢と宋美齢」を発表したが、執筆の動機として、謝冰心の近況が伝えられたことが関連していると推測される。しかしながら、文化大革命中に、謝冰心の「供述」書類に「罪状」とされる作品の目録に宋美齢についての文章があることからみると、「私の見た蔣夫人」の訳者として、武田泰淳の沈黙は謝冰心への一種の協力だと言わざるを得ない。[17]一読者からすれば「月明、笛と風がきこえる」に必ずしも謝冰心は登場する必然性がないかのようであるが、武田泰淳にとっては「月明、笛と風がきこえる」もまた「中国現代文藝楼」である以上、謝冰心を登場させることは、むしろ当然である。

武田泰淳訳謝冰心「私が見た蔣夫人」は武田泰淳が帰国後に日本の雑誌に発表したものだが、戦後の上海での創作と翻訳活動の延長上にあると考えられる。一方、武田泰淳「宋慶齢と宋

美齢」の創作意図の中には間違いなく謝冰心「私が見た蔣夫人」の翻訳者としての自己責任を果たすと言う要素が含まれている。文化支配と翻訳の関係を「政治と文学」と言う枠組みを参照しつつ考えるならば、ここで武田泰淳による「影を売る男」に触れる必要があろう。「影を売る男」は一九三七年三月に改造社から刊行された『大魯迅全集』の月報2に掲載されたエッセイである。その中で武田泰淳は「政治と文学」の問題は文学者の生き方の問題だとし、政治と文学とをそれぞれ悪魔と影に喩え、魯迅がまさに悪魔に影を売る男だと指摘し、次のように述べている。「政治に近づく事は「文学」＝影を無限に豊かなものにすることであった。影を売った男の記録は次のような結論を持って終わっている。悪魔に近づくことをおそるるなかれ！」このような魯迅認識を持ち、「政治と文学」の問題についてそのように理解している武田泰淳は、戦争末期に翻訳部主任として大日本帝国の文化機構である中日文化協会上海分会に就職したことも、また戦後、翻訳者として中国国民党中央宣伝部のために仕事をしたことも、ある程度主観的な自覚があってのことだったに違いない。それらの仕事はのちの小説家・武田泰淳にとっていずれもその文学を豊かにするものとなる。

武田泰淳による戦後の訳業については、これまで謝冰心「私の見た蔣夫人」や艾蕪「手」[18]が言及されているが、この度、筆者はまた新たに二篇を発見した。馮雪峰「暴露について」（二）、（三）（『中華日報』一九四七年六月三日、四日。原題「関於暴露」）と沙汀「叫び」（菊池三郎編『現代中国短編集』、一九五二年、創芸社。原題「呼号」）である。艾蕪、馮雪峰、沙汀はいずれも有名な左聯作家である。武田泰淳は一九三〇年代にかつて耶霊、張天翼、魏金枝等左聯作家の作品を翻訳したことがあるが、それは戦後の氏による左聯作家の翻訳と関連があるのだろうか。また、「私の見た蔣夫人」とは如何なるつながりがあるのだろうか、さらなる調査と検討が必要である。東京の『中華日報』に掲載された武田泰淳による逸文、また同紙の企画した、武田泰淳の文章を含む「五・四特輯」などに関する詳細な分析については、また別の稿に譲ることにする。

付記　本稿はNSSFC「近代以来中日文学関係研究与文献整理（1870–2000）」（17ZDA277）による研究成果の一部である。二〇一九年年三月二十三日、北京師範大学東亜文化比較研究中心にて開催されたシンポジウム『翻訳与中日近現代文学』で行った郭偉の口頭報告「武田泰淳与翻訳——以泰淳訳冰心著《我所見到的蔣夫人》為中心——」（「武田泰淳と翻訳——泰淳訳冰心「私の見た蔣夫人」」に基づく。なお、日本語の旧漢字、また、参照文献の中国語の漢

字については、適宜、日本新漢字に改めた。

注

（1）「私の見た蔣夫人」（『主婦之友』一九四七年四月号、三二〜三六頁）、署名、謝冰心、文末に「武田泰淳訳」の注記がある。なお、蔣夫人とは、当時の中国国民党政府の主席、蔣介石（一八八七—一九七五年）の妻である宋美齢（一八九八—二〇一三年）のことである。

（2）例えば、佐藤普美子「新詩閲読与感性創新：从武田泰淳的《臧克家与卞之琳》**談**起」（『駒澤大学総合教育研究部紀要』第十三号、二〇一九年三月、七五〜九一頁）。

（3）「私の見た蔣夫人」はすでに虞萍によって「我所見到的蔣夫人」（『中国現代文学研究叢刊』第六期、二〇〇六年、一〇二〜一〇八頁）という題で中国に翻訳、紹介されている。当該謝冰心の逸文に言及した文章は、他に岩崎菜子「資料紹介　プランゲ文庫（占領軍検閲刊行物）より発見された謝冰心の著作等とその意義」（『野草』第七十八号、二〇〇六年、七六〜一〇二頁）、王炳根「謝冰心与宋美齢」（『中国現代文学研究叢刊』第六期、二〇〇六年、九二〜一〇一頁）、岩崎菜子著、胡明揚訳「冰心旅居日本期間的佚文的発見与美軍〝占領期〟的審査」（『中国現代文学研究叢刊』第一期、二〇〇九年、九一〜一〇〇頁）等がある。なお、岩崎菜子によると、二〇〇二年当時、青柳真理がインターネット上で「私の見た蔣夫人」を含む謝冰心の複数の逸文の書誌情報を紹介していたとのことである。

（4）拙論「武田泰淳における「翻訳」——中国東北関連作品の翻訳にふれつつ——」（『野草』第七十六号、二〇〇五年、三五〜四八頁）。

（5）虞萍「日本における冰心研究文献と資料」（『冰心研究——女性・死・結婚——』二〇一〇年、汲古書院、二六三頁）に、「五・四と冰心女史」が武田泰淳の作として「少年の一瞥　五・四文学について」（上・下）とともに、いずれも題名のみ収録されている。

（6）秦剛「上海で出発した戦後派作家——雑誌『新生』の堀田善衛と武田泰淳」（『すばる』二〇一九年三月号、二五四〜二五九頁）。同『すばる』には以下の、堀田善衛、武田泰淳全集未収録原稿も再録された。堀田善衛「文学の立場」（『新生』創刊号）、伏木海之（堀田善衛）「中国のポスター」（『新生』第五期）、武田泰淳「敷衍について」（『新生』第四期）。本稿で紹介する武田泰淳の逸文「中国文学と世界」は秦剛氏によるご提供である。謝意を表したい。

（7）「（°）」は郭偉が補ったもの。原文は句点の一部を省略している。

（8）詳細については拙論「武田泰淳と現代中国の知識人——胡適の場合」（『社会文学』第二十号、二〇〇四年、一二九〜一三八頁）を参照されたい。

（9）記事の題名は「中国文学を紹介　対日文工会文芸懇談会」。『改造日報』関連事項を含め、終戦前後の上海における武田泰淳については、木田隆文「中日文化協会上海分会と戦時上海の翻訳事業——武田泰淳「上海の螢」を手掛かりとして」（『アジア遊学』二〇五、二〇一七年二月、一五二〜一六六頁、勉誠出版）を参照。

（10）島田大輔「占領期『中華日報』『内外タイムス』の研究　一九四六—一九五三（上）——経営と紙面分析——」（『メディア史研究』第四十一号、二〇一七年二月、四三〜六七頁）。なお、中国駐日代表団とは、戦後、当時の中国国民党政府から日本に派遣された代表機構である。原名は「盟国対日委員会中国代表団」。一九四六年三月設立、同年六月に「中国駐日代表団」に改名。「中華民国代表団」と称されることもある。

（11）創刊理念は『中華日報』一九四六年十二月十日紙上の社説、「夙願達

成に際して」による。

(12) 日本国内現存が判明している『中華日報』には欠号が多い。現時点で、確認できた当該新聞所載の武田泰淳名義の文章は、一九四七年五月一日号の「明女士の苦しみ――茅盾『腐蝕』について――（二）」が最も早期のものである。茅盾『腐蝕』についての連載評論であるが、（二）（三）（四）は確認できたものの、（一）は未見。なお、「中国文学と世界」にも茅盾『腐蝕』に関する論評がある。

(13) 蔣夫人関連の謝冰心重慶時期については、牧野格子「謝冰心と〝蔣夫人文学奨金コンクール〟：文芸部門受賞作品審査をめぐって」（『関西大学中国文学会紀要』二〇一二年三月、三三～四六頁）を参照されたい。なお、本稿のための資料収集の段階で、牧野格子氏に日本における謝冰心研究などについてご教示をいただいた。謝意を表したい。

(14) 宋慶齢（一八九三―一九八一年）は、中国の政治家、社会活動家。中華人民共和国の名誉主席。孫文の妻。姉の宋靄齢（一八八九―一九七三年）、妹の宋美齢と共に総称される「宋氏（家）三姉妹」の一人である。

(15) 『杜宣文集』（第六巻、五二九頁、二〇〇四年、上海文芸出版社）に、堀田善衛、夏衍、杜宣、武田泰淳、謝冰心が写っているカイロ会議での記念写真が収録されている。

(16) 影山巍「新中国と謝冰心」（『中国文芸座談会ノート』第二号、一九五四年十一月、四頁）。倉石武四郎訳「中国文学のゆくて――老舎、許広平、兪平伯、謝冰心、趙樹理、田漢、蕭三」（『新日本文学』一九五五年二月、八一～八九頁）。影山巍、倉石武四郎の北京訪問と謝冰心へのインタビューについては、虞萍『冰心研究――女性・死・結婚――』（二〇一〇年、汲古書院、六五～六六頁）を参照。

(17) 王炳根「謝冰心与宋美齢」（『中国現代文学研究叢刊』第六期、二〇〇六年、九二～一〇一頁）によると、冰心の「供述書」に挙げられていたのは、『婦人公論』一九四七年九月号に発表された「最近の宋美齢女士」である。上記の文章は、発表時期と内容から見て、「私のみた宋美齢女史」（謝冰心談、記者文、『淑女』一九四八年一月号）とともに、武田泰淳訳「私の見た蔣夫人」に類似している。

(18) 武田泰淳訳艾蕪「手」については、長田真紀「武田泰淳研究――「改造評論」発表の翻訳「手」について（上）――」（『上田女子短期大学紀要』第二十九号、一一～二五頁、二〇〇六年三月）を参照。